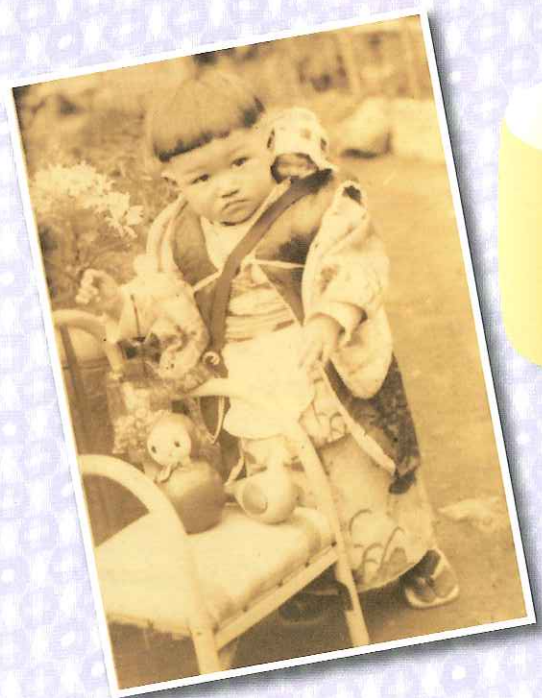


第12回 富士・沼津・三島 3市博物館共同企画展



はじめに

今回の企画展は、子どもの遊びをメインテーマに、季節の遊びや伝統の遊びを紹介します。近年コンピュータや電子玩具の発達により、昔ながらの遊びの形態が失われつつありますが、四季折々に日本の風土で培われてきた伝統的な遊びは、子どもの遊びの原点といっても過言ではないでしょう。忘れられつつある子どもの遊びや楽しみを振り返り、現代ほどに物はなくとも豊かな「あそび」の文化を、再発見してみませんか。

**巡回
予定**

富士市立博物館

平成20年

7月19日(土)~9月23日(火・祝)

沼津市歴史民俗資料館

平成20年

10月1日(水)~12月7日(日)

三島市郷土資料館

平成20年

平成21年

12月14日(日)~2月22日(日)

主催／富士・沼津・三島三市博物館連絡協議会

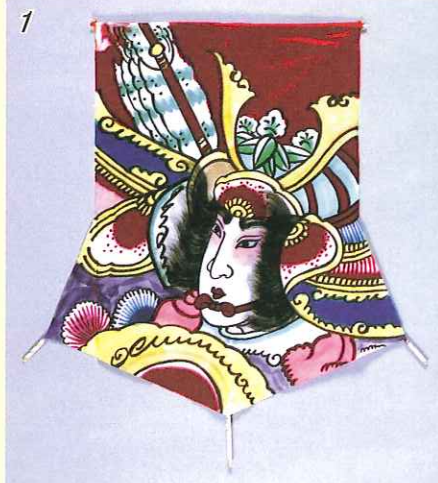
協力／日本雪だるまの会

季節と伝統の遊び

季節の移り変わりとともに、さまざまな遊びや玩具を見出すことができます。季節の節目の行事には、開運や子どもの成長を願うものが多く、遊びや玩具という身近な形態を通して伝えられてきました。

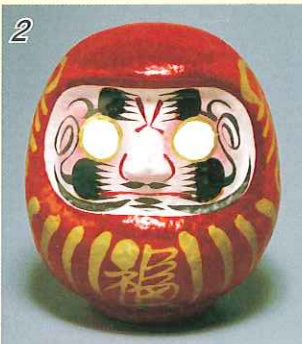
1 長泉の凧(富士市立博物館蔵)

凧の起源は諸説ありますが、日本では平安時代の『倭名類聚抄』に紙鳶、紙老鴎と記されているのが古い記録です。江戸時代に入ると子どもの正月遊びの玩具として流行するようになりました。静岡県内では、浜松・相良・横須賀などの遠州地方で、古くから端午の節句を中心に凧あげ行事が盛んです。静岡県東部では、関東の影響が正月前後にあげることが多くみられます。



2 鈴川達磨(富士市立博物館蔵) 3 全国の達磨(日本雪だるまの会蔵)

達磨は、新しい1年が開運・招福に恵まれるよう、庶民の願いが込められた縁起物で、初詣の寺社や市中での初市などに並びます。大きな達磨市が立つことで有名な毘沙門天大祭で売られる鈴川達磨は、静岡県東部を代表する郷土玩具となっています。



6 絵双六「寿曾我対面双六」(富士市立博物館蔵)

絵双六は、中国では古くからありましたが、日本では江戸時代に始まったといわれています。宗教的な内容の仏法双六が最も古く、徐々に娯楽性が加えられて道中双六、武勇双六、角力双六なども作られ、子ども向けの遊戯具に変化していきました。江戸時代中ごろから錦絵の発達に伴い、絵双六も隆盛し、子どもの正月遊びとして定着していきました。



4 江戸木地玩具独楽(日本雪だるまの会蔵)

5 左：姫路鉄輪独楽、中央：木地独楽、右：鉄独楽(日本雪だるまの会蔵)

独楽は、木、竹、貝殻、金属、ガラスなどの素材でつくられ、形態もさまざまで種類が多い玩具です。歴史は古く、もとはドングリなどの木の実を回して遊んだ自然玩具から発達したといわれています。凧と同様江戸時代に広く庶民に広まり、明治期に入ると鉄胴独楽という勝負独楽が少年の正月遊びとして流行しましたが、交通事情などによりこの種の路上遊戯は衰退していきました。それでも全国各地に郷土玩具として多くの独楽が作られ、ベイ(貝)ゴマなども根強く伝えられています。

7 桃の節句の雛飾り(富士市立博物館蔵)

8 端午の節句の武者飾り(三島市郷土資料館蔵)

桃の節句と端午の節句は、それぞれ江戸幕府が定めた五節句のひとつです。3月3日の桃の節句ですが、古代中国で旧暦3月初めの巳の日(上巳)に行われていた、身体の穢れを移した紙人形を川に流す行事が、日本で「上巳の祓い」という宮中行事に発展しました。その際、桃の花を供えて白酒を飲み、歌を詠む曲水の宴が行われたことから、桃の節句と呼ばれるようになりました。また、平安時代には「ひいな」という小さくかわいらしい人形があり、これのまま事のように遊ぶことを「ひいなあそび」と呼びました。現在では雛人形が飾られますが、身の穢れや災害を人形に身代わりとなってもらい、子どもの息災を願う信仰が根底にあります。地方によっては男女を同時に祝うところがあり、静岡県内でも志太、安倍、庵原、富士地方では、旧暦3月3日に近い4月3日に、男児は天神雛、女児は内裏雛を飾って祝いました。

一方、5月5日の端午の節句は、5月最初の午の日にあたります。中国では古くから、「五」が重なるこの日を悪い日としており、日本でも邪気をはらうという菖蒲や蓬を軒先に挿したり、湯に入れて入浴する風習が生まれました。江戸時代には、菖蒲を編んだ束を地面に打ちつけ、その音の大小によって勝負する菖蒲打ちという遊びが流行しました。現在では、菖蒲が武を重んじる尚武に通じることから、武家が用いた出陣道具を座敷に飾ったり、鯉幟などの外幟を立てる風習が残っています。





9 七夕人形 (富士市立博物館蔵)

七夕は、旧暦の7月7日に行う行事で、七夕祭、星祭ともいいます。江戸時代には、七夕に笹飾りを作ったり、藁馬を作る習俗などが庶民にまで広まりました。長野県松本市周辺には、紙で着物の雛形を作る七夕紙衣や七夕人形を飾る風習があります。これは、針仕事の上達や着るものに困らないように、などの願いが込められているといえます。



10 八朔の馬玩具 (日本雪だるまの会蔵)

11 由比の宝船・唐桑の木船 (日本雪だるまの会蔵)

福岡県遠賀郡芦屋町には、300年近い歴史があるという八朔の節句行事に飾られる藁馬があります。八朔とは、旧暦の8月1日(朔日)で、徳川家康が江戸城に入った日であることから、幕府の式日とされ諸大名や直参旗本は江戸城に登城する慣わしでした。芦屋町の八朔行事は、江戸初期の藩主・黒田如水の国入りに由来するようですが、男の子の成長を願って行われる珍しい夏の風習です。

静岡県庵原郡由比町の宝船は、同所の桶職人が由比漁港の船をかたどり、付近の子どもたちの遊び道具として与えたのがきっかけとなったもので、桶によく使われるサワラという木1本からノミを使ってくりぬくという丸木舟式に作られています。こうした木船は、宮城県唐桑の木船、和歌山県熊野の鯨船、千葉県勝浦の大漁船、広島県の田面船、高知県の土佐鯨船などが見られ、主に港町に伝えられています。

12 左：尾道の三体神輿、中央：祇園山鉦、右：阿波の大津神輿 (日本雪だるまの会蔵)

13 上：鹿児島神宮の初鼓、下：宇都宮のデンデン太鼓 (日本雪だるまの会蔵)

14 三春張子 天狗面玩具 (日本雪だるまの会蔵)

四季折々の祭礼には、豊作を祈る、疫病を退散させるなど、さまざまな人々の思いが込められていますが、秋に行われる祭りは、収穫を祝うものが多く見られます。祭りには、山車、神輿、屋台、天狗やひょっとこの面など、さまざまな玩具の露店が立ち並びました。大人も子どもも、年に数回の祭りを心待ちにし、こうした露店の玩具を買ってもらうことは、子どもたちにとって何よりの楽しみでした。

祭礼の華である神輿や山車の玩具は、各地で盛んに作られ、子どもたちに親しまれました。江戸神輿や広島県尾道市の三体神輿、岐阜県高山市の花神輿などが知られています。

太鼓玩具には、中国から渡来した振太鼓の系統をくむ、でんでん太鼓の一種の江戸の振太鼓や京阪の豆太鼓(ぶりぶり太鼓)や、江戸時代初期に現れたばちでたたいて鳴らす太鼓、また太鼓の胴を広くした締め太鼓などがあります。

面玩具は、人間や動物の顔に似せて作った面を玩具化したもので、神事や神楽などで用いられた面から影響を受けているといえます。江戸時代には、天狗、おかめ、ひょっとこなど多種多様な面玩具が張子で作られ、縁日などで売られました。福島県郡山市西田町で古くから作られている三春張子は、江戸、京都をはじめ、九州や北陸などの遠方でも愛玩され、なかでも面玩具は各地の祭礼で子どもの玩具として人気があり、1000種もの型があったといえます。現在でも、雄狐、雌狐、毘沙門、青天狗、鬼などが作られています。



15 酉の市の熊手玩具 (日本雪だるまの会蔵)

11月から12月にかけて、関東地方を中心に酉の市が盛大に催されます。市では、おかめや七福神、大判小判など招福の縁起物を飾った熊手を売る露店が立ち並びます。熊手には、鷲が獲物をわしづかみにするところから、その爪を模したともいわれ、福をかき集める、わしづかむ、といった意味があるといえます。商売繁盛を願って毎年少しずつ大きな熊手を買うという風習もあり、新しい年迎えるのための年中行事のひとつです。

16 押し絵羽子板 (日本雪だるまの会蔵)

年の瀬に立つ市を「歳(とし)の市」といい、新年を迎えるための注連飾りや、破魔矢・破魔弓といった縁起物、正月準備のための日用品などが売られます。

有名なものは、浅草の浅草寺境内で行われる羽子板市で、羽子板や羽根、凧や正月の縁起物を売る露店が軒を連ねます。羽子板に使う羽根は、古くは蚊を捕食するトンボに似せて作られたもので、蚊退治、子どもの疫病よけのまじないとして羽根突きをしたという説もあります。羽子板に描かれる主題も、中国から伝来した正月の火祭り「左義長」が描かれた古いものを初め、初日の出や鶴亀、宝尽くし、花鳥など多種多様なものが生まれました。江戸後期には、流行していた押し絵細工が羽子板に取り入れられ、押し絵羽子板が作られました。明治以降は、正月飾り用の押し絵羽子板などのほか、正月遊びに使われるものなど、様々なものが羽子板市で売られています。



こどもの遊びをテーマとした作品

人形創作作家・野口三四郎のぐちさんしろうは、明治34年(1901)、現在の三島市本町に生まれました。昭和5年(1930)、28歳で本格的な人形制作を始め、昭和12年(1937)35歳で生涯を閉じるまでの僅か6・7年の間に張子人形を中心とした作家活動を行いました。昭和9年(1934)に鹿児島寿蔵かごしまじゆぞう(人間国宝)・堀柳女ほりりゆうじよ(人間国宝)・野口光彦のぐちみつひこといった人形界を代表するメンバーと共に甲戌会こうしゆかいを結成し、人形芸術運動に尽力しました。亡くなる前年の昭和11年(1936)には、第一回総合人形芸術展覧会において、三島の水辺で遊ぶ子供たちを題材にした作品「水辺興談すいへんきやうだん」を出品し、最高賞である人形芸術院賞を受賞しています。



野口三四郎 (1901～1937)



影ふみ

1



羽子板

2

三四郎人形にみる遊びの世界

三四郎が創作した「三四郎人形」は、幼い頃の山や川や野原で遊んだ懐かしい記憶を思い出させるような、ほのぼのとした素朴な人形として親しまれています。作品の中には影ふみ、水あそび、トンボとり、かくれんぼなど、昭和初期のこどもたちの遊びをテーマとした作品が多くみられます。



トンボとり

3



ブランコのリ

4



5

雪だるま



水あそび

6



7

かくれんぼ

- 1「影ふみ」 個人蔵
- 2「迎春」 三島市郷土資料館蔵
- 3「トンボとり」 個人蔵
- 4「春日庭」 個人蔵
- 5「少年の四季(冬)」 個人蔵
- 6「水辺興談」 個人蔵
- 7「春」 個人蔵

あそび歳時記

2008.7.19 発行

- 富士市立博物館 富士市伝法66の2 広見公園内 Tel. 0545-21-3380
- 沼津市歴史民俗資料館 沼津市下香貫島郷2802の1 沼津御用邸記念公園内 Tel. 055-932-6266
- 三島市郷土資料館 三島市一番町19の3 楽寿園内 Tel. 055-971-8228